スピーキング能力向上を目指す EFL 学習者が知っておくべき８つのこと

今　井　由美子

Abstract

Many students in the Department of English at Doshisha Women's College of Liberal Arts feel that they are not good at speaking in English even though they have studied it for more than six years. However, they still want to improve their speaking skills as much as possible. For listening, learners struggle to deal with sounds which disappear in an instant. For speaking, they have to plan what to say, select words and expressions, and give utterance to their thoughts in an instant, following both grammatical and pronunciation rules with also being under the pressure of producing language with accuracy. This article attempts to help students realize that speaking is not a simple task and that there are many factors to keep in mind when communicating.

１．はじめに

英語教育においてはICT 環境整備が進み、例えば筆者が会員である外国語教育メディア学会（LET）においてもICT を活用した教育の効果が検証・報告されている。しかしICT 環境が整ったからといって学習者の飛躍的な英語力向上が約束される訳ではない。学習者はICT の恩恵を受けながら、英語を「聞く」「話す」「読む」「書く」という４技能をバランスよく訓練し、実際のコミュニケーションに役立つ言語学習を進めていかなければならない。様々な教材や方法の中から自分に合った英語学習方法を選び、地道な努力を惜しまず継続的に取り組むことができる学習者のみが、自己の掲げた目標（例

えばTOEICテストで700点達成、協定留学実現、教員採用試験合格など）達成に確実に近づくと言えよう。

２．スピーキング科目への期待と現実

2019年度４月の本学英語英文学科１年次生に対して入学後間もなくアンケート調査を行った。「大学での英語学習においてあなたが最も力を入れたいのはどれですか」という問いに対して146名中109名（75%）が「スピーキング」と回答した。また「英語英文学科には４つの科目群（文学、文化、言語、コミュニケーション）がありますが、３年次以降どのコースを選択したいと考えていますか」という問いに対して、57名（39%）が「コミュニケーション」と回答した。この結果は、多くの学生が「英語を流暢に話せるようになりたい」という強い希望があり、「高校まで６年間（以上）も勉強してきたのにしゃべれない」という現実がよりそう思わせていることが伺える。

一方で2017年度５月に１年次生から４年次年生に対して、学年が上がるに従いどのように英語学習に対する考えが変化するのか調査を行った。「最も苦手とするスキルはどれですか」の問いに１年次生の多くが、「スピーキング」と回答した。１年次生については、スキル向上のための練習を始めたばかりだと思えばこの回答には驚かなかった。しかし２年次、３年次、４年次の学生においても同様の回答であった。「なぜ苦手だと感じているのですか」の問いに対する６つの選択肢（①練習しないから、②そのスキル自体が好きでないから、③そのスキルに重要性をあまり感じないから〈優先順位が低いから〉④努力しても無駄だと思っているから、⑤努力していてもなかなか結果として表れないから、⑥自分に合った練習の仕方がわからないから）から、各学年で多くの学生が選んだ理由は、多い順に⑥「練習の仕方がわからないから」、①「練習しないから」、⑤「なかなか結果が表れないから」であった。大学で英語英文学科に在籍し、専門分野（文学・文化・言語・コミュニケーション）での研鑽と同時に英語学習者として４つのスキルの向上を目指して

はきたが、スピーキングについては「苦手」意識を常に感じている。なぜならばスピーキングの「練習の仕方がわからない」ため、「練習しない」状態になり、「なかなか結果が表れない」と感じざるを得ないのである。

一方で、練習の結果が表れないと学生らが感じる理由は別のところにもあると筆者は感じている。それは学生らがスピーキングにおいて「評価されることに慣れていない」ということである。本学科生は１年次よりTOEIC Listening & Reading IPテスト（L＆Rテスト）を団体受験し、学生らはリスニングとリーディングのテストスコアを受け取り、受容的能力における英語力の伸長を確認する機会がある。筆者がリエゾンを務める１、２年次のリスニング科目（必修）においては、TOEICのリスニングスコアは成績の一部として評価の対象となるため学生は真剣に取り組む。しかしTOEIC Speaking & Writing IPテスト（S＆Wテスト）は、本学科生にとってまだ必須受験として課されていない。そこで、スピーキング力をつけたいと思っている学生が多いことを踏まえ、TOEIC S & W IPテストの受験機会を用意し、受験希望者には学科から受験料補助を行った[1]。S & W IPテストを受験することは、TOEICにおいて４つのスキルのスコアが揃うことになり、学生にとっては受験料補助も受けることができありがたいことであるはずだった。しかし、定員20名（2017年度）で募集したところ受験希望者は若干名であった。

また、筆者が関わったプロジェクトにおいて、OPIc[2]（Oral Proficiency Interview-computer、言語駆使能力を客観的に測定できるテスト、受験料10,800円）の受験希望者（受験料無料）を４年生（2017年度）から募ったところ、応募者はほぼ皆無に等しいものであった。スピーキング力を測るテストは個人で受験する場合、高額な受験料を支払うこととなる。大学生として最後の英語テスト受験の機会になるはずだったので、受験に興味を示す学生が少なくとも10名程度は現れてくれるだろうと期待したが期待外れな結果となった。

これらの実態を考えると、本学科生はスピーキング力を常々向上させたいと言ってはいるが、１年次春学期で自分のスピーキング力の「現在地」を確認することなく授業が始まってしまうために、評価される機会を逃し続けてきている、あるいは、避け続けてきていると感じる。評価されるということは現実を知ることで、つらく悔しい思いをすることにもなるが、目標に対しての課題が明確に示されることである。目標を掲げることは言語学習には必要である。また、本学科のスピーキングは１年次、２年次と英語のネイティブスピーカー教員が担当するが、受講生が勉強の仕方がわからないという感想をもっているということは授業方法にも検討すべき問題が隠れているのかもしれない。

３．本稿の目的

本稿の目的はEFL学習者としてスピーキング力向上を目指すために、スピーキングにはどのような準備が必要とされ、どのような能力が関係しているのか、「文字と音声」「受容的能力と産出的能力」「コミュニケーションのための４つの能力」「語彙」「意図的学習と偶発的学習」「ボトムアップ処理とトップダウン処理」「ハイ・コンテクストとロー・コンテクスト」というキーワードを交え明らかにすることである。

４．４つのスキル―文字情報と音声情報・受容的能力と産出的能力

理想的な言語学習は、学習者が４つのスキル（リーディング、ライティング、リスニング、スピーキング）を総合的にバランスよく身につけることである。４つのスキルは、大きく分けて２つの次元に分かれる。一つは視覚的な文字情報を媒介するリーディングとライティング（図１-【１】）と聴覚的な音声情報を媒介とするリスニングとスピーキング（図１-【２】）に分ける次元である。もう一つは、受容的能力（Receptive Skills）としてリーディングとリスニング（図１-【３】）と、発表的能力（Productive Skills）と

してライティングとスピーキング（図１-【４】）に分ける次元である。一般的に消えゆく音声情報を瞬時に理解しなければならないリスニングと時間的制約の中での意思伝達を求められるスピーキングの習得は、文字情報を媒介とするリーディングやライティングよりも困難である。

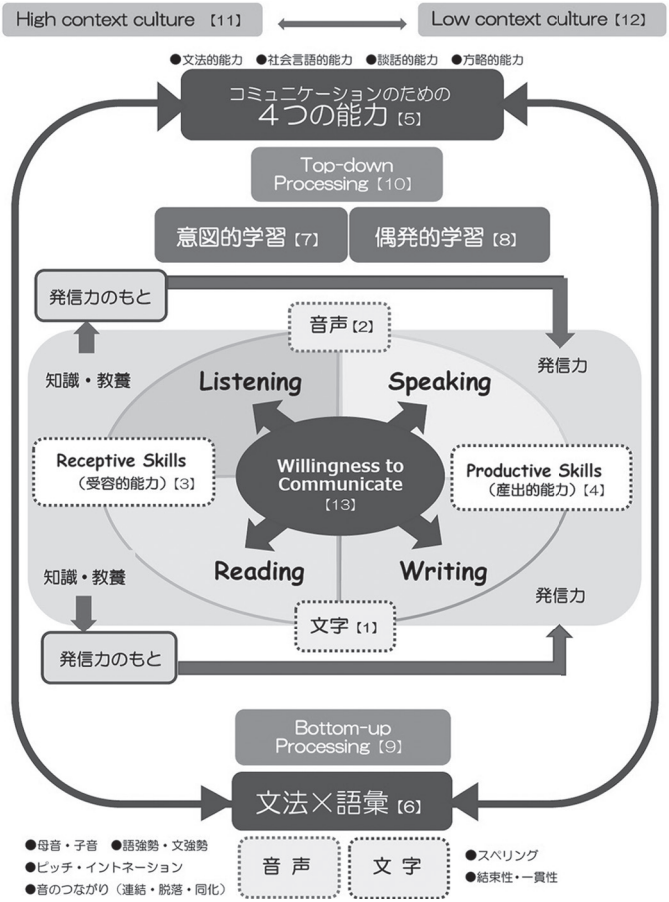

図１　リスニング・スピーキング・リーディング・ライティングに関連する事柄
（【数字】は本文中の数字と一致する）

５．コミュニケーション能力の４要素

音声情報のやりとりで成り立つリスニングとスピーキングはコミュニケーションという舞台が用意される。第二言語習得研究の分野におけるコミュニケーション能力（communication competence）には様々な定義があるが、一般的に、文法的能力（grammatical competence）、社会言語的能力（sociolinguistic competence）、談話的能力（discourse competence）、方略的能力（strategic competence）の４要素からなる定義（Canale & Swain、1980）が広く受け入れられている。文法的能力は言語知識全般（文法、語彙、発音）を指す。語彙を用いて文法に従い文をつくる能力のことをいい、言語の基本要素である。社会言語的能力は、社会的に適切な言語使用ができる能力を示す。相手との関係や場面、状況に応じて、適切なことばや表現を用いることがコミュニケーションを円滑に行う鍵となる。談話的能力は、流暢さを示し、つじつまのあるやりとりをスムーズに交わせること、対話として正しく自然な文章で会話できる能力のことをいう。方略的能力は、コミュニケーションの目的を達成するための対処能力をいう。言い換え、聞き返し、あえて自分の苦手な発音の単語の使用を避けること、返答に困ったときに話題を転換することなども方略的能力とされる。文法的能力、社会言語的能力、談話的能力における話し手の不備を補うのが方略的能力であり、これら４要素でコミュニケーションは成り立っている（図１-【５】）。

６．語彙の重要性

６．１　中学高校英語における語彙

コミュニケーションを成り立たせる言語の基本要素である語彙に着目してみよう。平成24年度施行の学習指導要領において、中学校の学習語彙は1200語、中学校および高等学校では3000語（中学校での1200語に加え高等学校では1800語）であった。最新の新学習指導要領（2018年告示、2022年より年次

進行実施）によれば、高等学校で指導すべき語彙数は従来の3000語から5000語に増加した。語彙・コーパスに詳しい投野（例、投野2006、投野2015）が挙げる学習語彙100語と2000語の重要性をふまえ、中学校での学習語彙1200語、また高等学校での学習語彙3000語の意味を考える。

６．２　高頻度語の100語

１億語のイギリス英語均衡コーパスBritish National Corpus（BNC）の話し言葉1000万語のテキストを集計し英単語の出現頻度順にリストを作成し、異なり語約57000語を調べた結果、最も頻度の高い上位100語が1000万語のデータ全体の約７割をカバーする活用度の高い語彙であることが明らかになった（投野、2015）。そのBNCの高頻度100語は、文の構造を決める動詞、動詞だけでは伝わらない微妙なニュアンスを伝える助動詞、文をつなぐ接続詞、話し手・聞き手・話題になるものを示す代名詞、前置詞、副詞などが大部分を占め、これら100語程度の語彙で文法の骨組みや土台ができているという。これら100語は中学校で学習する最初の基本語彙にふくまれ、学習者の将来の英語力に関わる重要な役割を担う。英語学習において最も重要だとされる、その100の語彙学習とその時期の指導が中学校英語で行われ、高校英語へと引き継がれる。

６．３　中学校での学習語彙1200語から2000語・3000語へ

中学校での学習語彙は1200語である。基本100語から語彙を増やしていくと、上位2000語で話し言葉の９割を、また書き言葉の８割をカバーすることになり、それらの半分が名詞である。英語力の基本となる骨組みを100語で形作り、その後1000語～2000語の名詞を中心とした語彙で表現に広さと深さを加えていく。中学校・高等学校での学習語彙は3000語であるが、特に話し言葉９割、書き言葉８割を占める高頻度語の2000語をマスターできるか否かが、実用レベルで英語を使えるかどうかを決定する重要な要素になる（投野、2015）。

これら2000語は高校終了時までには多くの教科書に出てくる単語であり、授業で扱われる。大学受験などでより難解な英文読解に必要となる高レベルの語彙（3000語～4000語）は学習者の自主的な語彙学習によるものとなる。また、語彙習得の研究でWaring and Nation（1997）は、学習者が3000語前後の高頻度語を覚えることの必要性を明らかにした。これらの語を覚えることができなければ他の語を覚えようとしてもほとんど意味をなさないという。

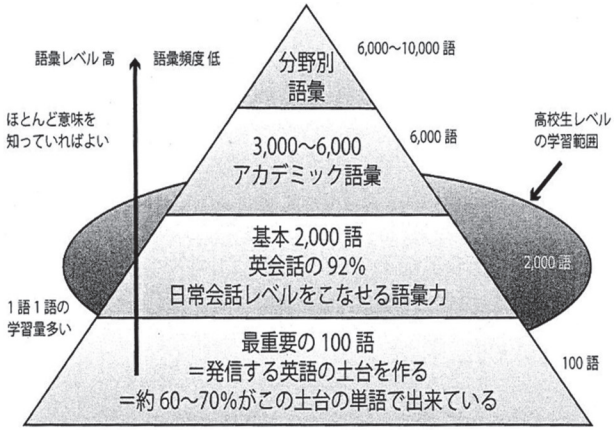

図２　投野（2015、p.17）による語彙力のイメージ

６．４　リスニング指導における研究―リスニング力向上に必要な語彙レベル

三根・枝澤・吉村・今井・布施・平岩（2006）は、英語専攻の女子大学生を調査協力者とし、3,000語レベルまでの語彙力を育成することがリスニング力向上に効果的であることを明らかにした。加えて3,000語レベルを習得することがアカデミックなリスニング・スキルを向上させる点で有効であることも示唆した。リスニングと語彙と学習方略調査の因子分析結果から、CELTテストにおけるリスニング高得点群と低得点群の間にみられた因子

は「文脈からの類推」「単語記憶」「音韻・背景知識」であることがわかった。高得点群はトップダウン処理を効果的に用いていること、発音を含めた語彙記憶ができていること、文章の中で生じる音韻変化、ピッチ・イントネーション、ポーズなど（図１-【６】）を理解していることが明らかになった。低得点群については、言語に関係なく理解に直結するための知識・教養を身につけること、発音を含めた単語記憶、音韻ルールの理解の必要性の３点が重要であることを示唆した。

枝澤・今井・古荘・布施・三根（2007）は、EFL学習者として3,000語レベルを習得することがアカデミックなリスニング・スキルを向上させることに有効であることを再検証すると同時に、英語力向上に伸び悩んでいる学習者にとっては2,000語レベルをできるだけ早く習得させることが、学習への興味を維持することになり、その後の英語学習継続の力となることを示した。

６．５　語彙の意図的学習・偶発的学習

EFL環境で英語を学習している限り、語彙を増やす努力は不可欠である。教科書に出てくる単語を「①見る→②スペリングを確認する→③発音を聞く→④発音してみる→⑤書いてみる」という覚え方は多くの生徒が行う方法であろう。試験にでる頻出単語集を眺める、単語の品詞や用法を確認する、例文を覚える、付属の音声教材で発音のチェックや練習をすることもできる。このような方法を意図的語彙学習（intentional vocabulary learning、図１-【７】）という。一方で、偶然手に取った本や雑誌、新聞などで読んだ文章に覚えた単語がでてきて、何度も目にすることでその単語の意味を再生することができると偶発的語彙学習（incidental vocabulary learning、（図１-【８】）になる。しかし、新しい単語が偶発的語彙学習によって定着するためには膨大な量の英語に触れる必要があり、回数としても「16回」出会う必要がある（Lightbown & Spada, 2013）。EFL環境では学習者が意図的学習と偶発的学習の両方ができるように、工夫が必要となる。単語をただ覚

えるだけでなく、辞書で用法を確認し、スピーキングやライティングで意図的に使うように心掛けると効果的であろう。相手に理解してもらえることで喜びを感じ充実感を得、たとえ相手に通じなかったり間違いを指摘されたとしても、その悔しさが単語を覚えるきっかけとなり語彙学習には確実にプラスになる。

７．リスニングとスピーキング―音声情報を扱うことの困難さ

日常生活において母語で聞く・話すについてわれわれは特別な訓練をすることなしに行っている。しかし外国語学習となるとそう容易ではない（本稿ではリスニングおよびスピーキングのプロセスについてはあえて触れない）。

リスニングにおいては、学習言語の音声をまず聞き手がその言語音として認識することから始まる。しかも音声は瞬時に消える。リスニングは言語能力の全般的な基盤であり、ボトムアップ処理（図１-【９】）とトップダウン処理（図１-【10】）をうまく組み合わせながら理解につなげていく。受け取った音声をテキスト化し意味化する処理を速やかに行うためには語彙力は不可欠である。言い換えれば、音声を聞いてもその音声で示される語彙を習得していなければ理解につなげることができない。

スピーキングにおける困難さは、たとえ学習言語の母音・子音の音声の認識ができ、受容語彙が十分にあるとしても、容易に行えるものではないという点であろう。「何年も英語をやってきたのに全く話せない」という嘆きを頻繁に聞くように、話し手に十分な知識があってもスピーキング能力が伴うとは限らない。それはライティングと比較した場合のスピーキングの特徴として、時間的制約があること、目の前に聞き手となる相手がいるということ、正確さを気にしすぎるために余計なストレスを抱えこんでしまうからであろうと推測できる。文法や音韻ルールによる困難を含んだ活動を外国語で行っているのであり、難しいと感じるのは当然のことである。

８．発信する力「話す」「書く」のもとになるもの

８．１　「聞く」「読む」

かつては、外国語を学ぶ目的は書物を読み、外国からの学問・文化を受容することであった。しかし現代はインターネットで世界中と瞬時につながり、英語が国際共通語（Global Englishes, Rose & Galloway, 2019）として使われる以上、受容するだけにとどまってばかりはいられない。求められればこちらからも発信し、相手との対話を深めることができる英語力を身に付けることが今の時代に必要なコミュニケーション能力である。「発信する＝英語を話す・書く」という発信力のカギを握っているのは実は、英語を聞く力・読む力である。我々は情報を聞きながら、消えてしまう音声を記憶に残すために文字で記録し、聞いたことを整理し理解へとつなげる。さらに読むことで知識を広め教養を深める。後にはこれらが自らの知識や教養となり話され書かれることになる。

「もっと英語が話せたら…」と学生がよく口にする。たしかに英語で不自由なく言いたいことを表現できるとすれば理想的である。しかし、その前に母語である日本語で日頃からどれくらい発言しているか考える機会を与えてみると学生はあることに気づくはずである。母語である日本語でも話すことができない内容について学習言語の英語で話すことは不可能に近い。このような実情があるにもかかわらず、英語で質問され何も言えなかったからといって「もっと英語ができたら…」と英語のせいにしてはいけない。気持ちや考えを伝えるという目的を達成するためには、日頃から知識教養を身につけ積極的に発信しようと心がける習慣を母語においても身につけておく必要がある。

８．２　表現することへの意欲をもつこと

コミュニケーションとは、相手から投げられたボールを受取りこちらから

も相手をめがけてボールを投げるキャッチボールでなければならない。相手から発信されたメッセージを受け理解するだけでなく、こちらからも返信してはじめてお互いの理解が深まるものである。発信するためには、「伝えたい内容をもっていること」と「勇気を出して表現すること」の双方が重要となる。コミュニケーションとは英語、日本語という言語の種類で異なるものではなく、話すことをつくりだす思考力、目に見えないものや形に表せない気持ちをことばで表現する言語力、受取った情報を批評する力など、言語そのものを土台にした最も人間的な活動である。表現したいことがある、伝えたいことがあるということが土台にあり、それを日本語で行うか英語で行うかのチャンネルの違いである。

しかしながら、実は情報の送り手になることは容易なことではない。日本はハイ・コンテクスト（high context、コンテクストの共有性が高い文化のこと、図1－【11】）の環境にあり、伝える努力やスキルがなくても相手の意図を察しあうことで、なんとなくお互いを理解することができるという。このような環境で生まれ育った日本語母語話者にとっては、あえて伝えたいこと、話したいことを言語にすることが容易ではないという。一方、欧米はロー・コンテクスト（low context、図1－【12】）文化とされ、コンテクストに依存せず、言語によるコミュニケーションを図ろうとする。言葉で表現することに対し積極的な姿勢を示し、その姿勢が高く価値される。言語で表現するということでは正反対の方法をとる日本文化と欧米文化では、コミュニケーションに関する能力は異なった見方をされる。日本語母語話者が英語を話す際に注意すべきポイント、努力すべきポイントがここにある。

言いたいことがあっても適切な表現がわからないとき、自分が知っている単語を総動員してでも説明を試みる。自分に不利になるような流れになるのを防ぎたいなら話題を変えてみる。これもコミュニケーション能力の一つである。そして、実はこの難しいことをわかりやすい言葉で説明できることこそが「流暢さ」なのである。しかし、英語で言いたいことを言うのはなかな

か大変なことである。いつもうまく適切な表現を思いつくとは限らないし、相手の意見に同意できない場合もある。説明するのが面倒くさいと感じることもある。大切なのはコミュニケーションしようする意欲（willingness to communicate、図１－【13】）を持つことである。ことばは意味をもち、人の心に入り込むもので、発言者の責任が伴う。ここで面倒くさいとあきらめるのは簡単だが、母語と同じように英語で表現できるようになるためには、恥ずかしい思いをしてでも何とかしてことばとして口から英語を発する努力をしなくてはいけない。うまく表現できなかった、理解してもらえなかったという口惜しさを次の努力へ繋げていかなくてはいけない。そういった苦労を乗り越えるから、相手に思いが通じたとき、英語で自分を理解してもらったときの喜びは大きい。その成功体験が「もっと話せるようになりたい」という動機付けになる。失敗も成功も語学学習には必要な経験となる。

９．EFL学習者が知っておきたいこと―５つの学習項目とレベル別重要度

言語学者のHiggs（1982）が発表したモデル（図３）は40年近くの年月が経過しても依然としてEFL学習者にとり貴重なアドバイスを与えてくれる。第二言語を学習する際に主に必要となるVocabulary（語彙力）、Grammar（文法知識）、Pronunciation（発音）、Fluency（流暢さ）、Sociolinguistic（社会言語的能力）の５つの項目の重要性（＝必要性）が、学習過程（Level １～５）においてどのように変化するかを説明し、合計100％で５項目の重要性を示す。例えば、Level１（Novice level）で縦に線を引いてみると、①Vocabulary、②Grammar、③Pronunciationの順に重要性が高く、④Fluencyと⑤Sociolinguisticはまだそれほど必要とされない。つまり、初級レベル学習者にとって最も重要なのは「基本的な単語の意味と基本文法を覚えること」と「発音を覚えること」である。Level３（Intermediate level）ではGrammarとVocabularyが入れ替わるものの、これら２つの重要性は依然として高い。FluencyとSociolinguisticは徐々に求められる

ようになり、Fluencyを追いかけるようにSociolinguisticが続く。つまり、中級レベル以上では表現の幅を広げるための「文法学習の必要性」が単語学習を上回り、単語を継続的に覚えつつも「言語を理解する力」がより重要になってくる。同時に、伝達手段としての「言語の正確性やそのやりとり、使い方」なども求められるようになる。Level５（Advanced level）では５項目が１点にまとまっている。これは、上級レベルに至っては５項目すべてにおけるバランスのよさが求められるということを意味する。流暢さは、語彙と発音、文法の基礎がしっかり固まってから身に着くものであり、流暢に話すということは、社会言語的能力も自ずと話し手に期待される要素であるということである。

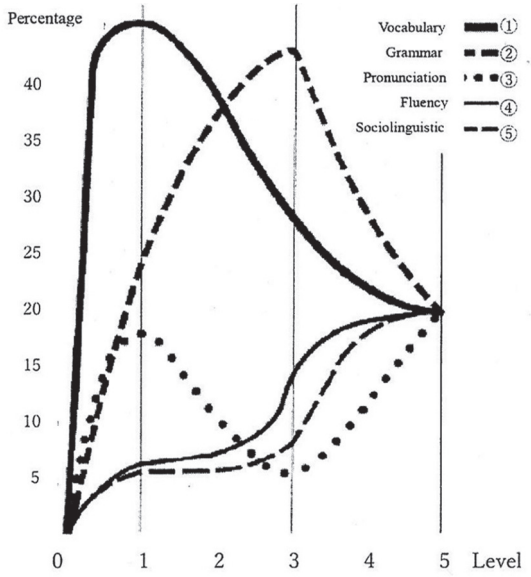

図３　Higgs（1982）の第二言語学習における５つの学習項目とレベル別重要度
（図中の縦線と凡例の番号は筆者による）

一方で、興味深いのは発音である。初級レベルで上昇後一旦下降し、上級レベルで再度上昇している。初級レベルは学習語の母音・子音の基本的な発音（音声学的要素）について学ぶ時期にあたり、母語との違いを意識した学習になる。とにかく最初は覚えた単語や文を音声として口から出すことが求められる。上級レベルではより流暢に言語を操るために、また、より豊かで複雑な表現を可能にするために強勢、リズム、イントネーションなど（音韻論的要素、かぶせ音素）について学ぶ時期となる。日本語母語のEFL学習者の多くは、「ネイティブのような発音」に憧れ「きれいな発音」ができることを理想にしているが、このモデルにおいては発音の重要性は単語や文法の重要性を上回ることはない。第二言語学習では豊富な語彙と言語を理解するための文法を基盤に意味のあるやりとりができること、相手や状況を踏まえて対話ができることが重要である。発音において学習者に求められるのは誤解されないレベルでの正確さである。英語のネイティブ・スピーカーではないのだから、ネイティブのように話す必要はない。

10. まとめ

スピーキング向上を目指すEFL学習者が知っておくべきことをまとめる。

1）早い段階で現段階でのレベルを知るためにスピーキング力測定のためのテストを受験すること。また学習の成果を確認するために定期的に受験する必要があること

2）４つのスキルにおいて、消えゆく音声情報を瞬時に理解しなければならないリスニングと時間的制約の中で意思疎通を求められるスピーキングの習得は文字を媒介とするリーディングやライティングよりも困難であること

3）「聞いてわかる」ことの舞台ではコミュニケーション能力の４要素（文法的能力、社会言語的能力、談話能力、方略的能力）が互いに助け合っており、その中でも言語の基本要素となっているのが文法的能力（文法、語

彙、発音）であること。そしてこの聞いてわかることがスピーキング能力の基礎であること

４）中学校英語をしっかり理解することがその後の英語学習の基盤となること。英語力向上に伸び悩んでいる学習者は2000語レベルの語彙習得は必須であり、3000語レベルの語彙習得はその後の学習の成果につながる条件となること

５）語彙習得のためには意図的学習と偶発的学習の必要があること

６）音声情報を瞬時に聞き理解するために、トップダウン処理（知識・経験がベースとなる）とボトムアップ処理（音声認識、語彙の理解がベース）を行っていること

７）ハイ・コンテクスト文化（日本語）とロー・コンテクスト文化（英語）においては言葉で説明する姿勢に差があることを知り対応すること。相手を理解する意欲、理解してもらうための意欲をもつこと

８）日本語を母語とする学習者が目指す英語の発音は誤解されないレベルの正確さであり、英語母語話者のように話す必要はないこと

スピーキングは容易なタスクではない。学習者自身が目標を達成させるためにいかに努力を継続するかが決め手になる。これらのことを理解し、スピーキングのための練習に取り組むことができれば、よりよい英語話者に近づくことになるであろう。

注

1　TOEIC S & W IP テストについて、本来の受験料7,970円（IIBC 賛助会員価格による受験料、通常は9,050円）のところ、2014年度および2015年度は3,000円の学生負担、2016年度および2017年度は2,000円の学生負担であった。

2　外国語でのコミュニケーションに必要とされるのは、単純に文法や語彙をどれだけ知っているかではなく、実際のビジネスや生活の場でいかに効果的で適切に言語を使えるかである。OPIc は、評価者との対面インタビュー方式でコミュニケー

ション能力を測定するテストOPI（Oral Proficiency Interview）を、受験しやすいインターネット基盤で実現し、その言語駆使能力を客観的に測定するテストである。

引用文献・参考文献

Canale, M. & Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing, *Applied Linguistics*, 1, 1-47.

枝澤康代・今井由美子・古荘智子・布施邦子・三根浩（2007）.『大学生における語彙力と英語標準テストの関連性』同志社女子大学総合文化研究所紀要、24、55-66.

Higgs, T. V. & Clifford, R. (1982). The Push Toward Communication, in Theodore V. Higgs (ed.) *Curriculum, Competence, and the Foreign Language Teacher ACTFL Foreign Language Education Series*. 57-79.

Lightbown, P. M. & Spada, N. (2013). *How languages are learned* (4th ed.). Oxford: Oxford University.

三根浩・枝澤康代・吉村満知子・今井由美子・布施邦子・平岩葉子（2006）.『リスニングにおける語彙サイズと学習方略』同志社女子大学総合文化研究所紀要、23、59-69.

Rose, H. & Galloway, N. (2019). *Global Englishes for Language Teaching*. Cambridge University Press.

投野由紀夫（2006）.『投野由紀夫のコーパス超入門』三省堂.

投野由紀夫（2015）.『発信力をつける新しい英語語彙指導』小学館.

Waring, R. & Nation, P. (1997). Vocabulary size, text coverage, and word lists. In N. Schmitt & M. McCarthy (eds.), *Vocabulary: Description, acquisition and pedagogy* (pp.6-19). Cambridge: Cambridge University Press.

若本夏美・今井由美子・大塚朝美・杉森直樹（2017）.『国際語としての英語：進化する英語科教育法』松柏社.